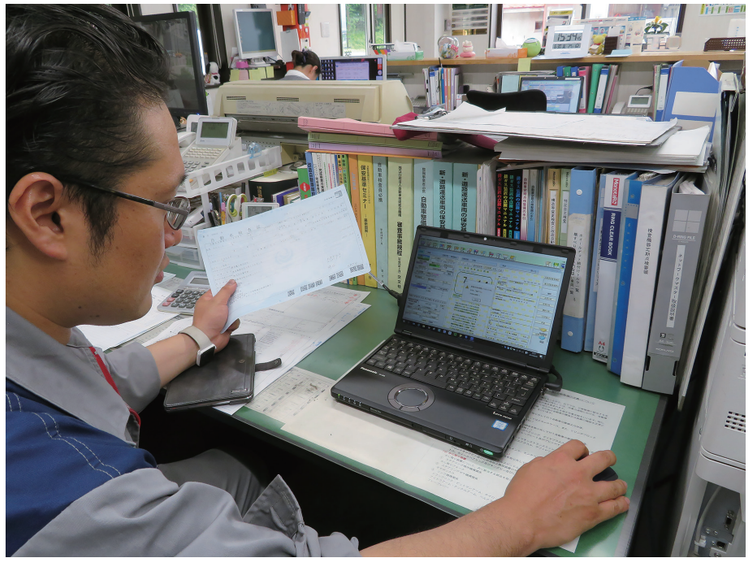
ツカサ工業

継続検査OSSで電子保適証を積極的に推進

大型車や大型特殊車両を中心に整備などを手がけるツカサ工業（佐藤憲司社長、長野県大町市）。今年4月から全国展開が始まった継続検査のワンストップサービス（OSS）において、保安基準適合証（保適証）の電子化に積極的に取り組んでいる。佐藤社長は「これからは情報で整備をする時代」と考えており、ITも活用した技術と整備情報の電子化をかけ合わせた工場づくりを推進している。



クラウド型とブラウザ型を併用する

経験やカンだけでなくITが必須

車両の高度化は、先進安全デバイスの搭載などにより加速傾向にある。そのため「整備事業者はIT化が求められている」と指摘する。一部の特殊車両などは、経験やカンで修理する部分もあるものの、技術だけでは直せないとの危機感の表れだ。その一環として、スキャンツール（外部故障診断機）を必須アイテムとして活用している。

保適証の電子化に取り組み始めた背景には、今後整備業として事業を進めていくうえで「国から指定をいただいている工場としては対応していくべきとの思いが強かった」ことがあるという。今年2月の長野県自動車整備振興会の事業場管理責任者研修に参加し、具体的な資料を見たときに「事業場管理責任者でもあり、検査員でもある自分ならばすべてのシステムを動かせる」と判断し導入を決めた。

試行錯誤を繰り返しながらもメリット多数

現在は運輸支局の窓口申請を組み合わせたハイブリッド方式による継続検査申請を行う。単月での電子保適証の交付件数は100件を超え整備専業者としてはトップレベルの申請件数となっている。

導入にあたってまずは、ブラウザ型の電子保適証システム（AIRAS）で電子保適証の交付を開始した。「クラウド型を使用してもシステムの仕組みや流れが分からなければ不具合に対処できないのでは」と考えたためだ。導入当初は、手数料印紙を貼る場所や事業場管理規定の改訂、大型特殊の3段書きに対応していないことなどに戸惑うこともあったが、「電子であれば間違いがあった場合には引き戻しをして再登録ができるため保適証上のミスはなくなる」とメリットをすぐに見出した。

入庫台数の7割が大型車になる

5年前に車検ラインを刷新した

AIRASでの登録の流れを会社全体で理解するまでに約1カ月ほどかかったという。その後は、ディーアイシージャパンのクラウド型の整備システムとAIRASを併用している。

AIRASで保適証情報を入力する場合は、受付時に1台ごとに情報を入力し一時保存する。その後、検査員が保適証情報を確認し、検査員情報を入力して一時保存。そして、事業場管理責任者が登録して交付するという流れになる。

電子化でデータ管理の利便性向上や時間短縮も

クラウド型は、過去に入庫がある車両の場合はそのデータが反映されるため、保適証情報の入力の手間を省くことができる。検査員情報は、あらかじめシステムに検査員名を登録することで、入力時に自分の名前を選択すればパスワード入力画面に切り替わる。保適証の交付決裁は、事業場管理責任者のほか、代行者をあらかじめシステムに登録することでスムーズなデータ送信を可能としているという。

また、電子化により最短20分程度で申請が可能になり、支局窓口での車検証の交付も時間短縮につながった。さらに、当日の検査台数が保安基準適合標章管理簿で確認できるなど、データの管理も容易になった。

ただ、現在はクラウド型でもすべてを完結できるわけではない。たとえば、エラーが発生した場合は、AIRAS保適証の照会検索機能でステータスを確認する必要がある。しかしそれも「いずれはクラウド型ですべてできるようになるのでは」と期待を込める。

佐藤社長は「長野県内で電子化に取り組み始めたのが最初だったため大変なこともたくさんあるが、やりがいも手応えもある」と強調する。技術と情報とITを駆使することで次世代に対応した整備工場としての生き残りを図る。

（太田 千恵）

待合スペースは事務所と完全に分けている

入口には電子保適に対応していることを明記

電子化には社員の理解も重要

ツカサ工業
佐藤憲司代表取締役

ー電子保適証のメリットとデメリットは

「重量税印紙を納付書に貼りつける手間が省ける。また、紙の場合は交付まで30分ほどかかるが、電子の場合は10分ほどでできるようになった。また、支局窓口での車検証交付時間も、紙の保適証の3分の1から半分ほどになったのではないか。ペーパーレス化による環境配慮もメリットの一つだろう。一方のデメリットは、大型特殊の3段書きに対応していないことや MOTAS への送信にタイムラグがあることだ」

ー社員にはどのようにして説明したか

「最初はよく意味を理解していない様子もあったが、部署ごとにやるべきことを説明した。たとえば、事務であればユーザーに同意書をいただく必要があるし、検査員の入力業務も変わってくる。説明だけでは理解できない部分も多いため、社内資料を作成しながら研修を行った。さらに、進めながら不具合が発生した場合はそのつどなぜエラーが起きたのかを一緒に解決して理解を深めた」

ー今後について

「クラウド型にステータスの照会機能が追加されるようになれば、利便性はさらに高まるだろう」